

.....

.....

.....

どれくらい眠っていたらだろうか。目を覚ますと、満天の星空が広がっていた。

“.....!”

何をしていたか思い出せない。二日酔いか？それにしても酔っていないようだ。

“.....”

とりあえず立ってみる。そして辺りを見渡す。しゃがんで地面を触ってみる。感触は土や砂に小石、見えるのは木々ばかりだ。

“Fuck damn, where am I?”

少し視線を先にやると、艶のない何かが落ちている。拳銃だ。とりあえず拾ってみると、知っているモデル—グロック・18C だった。

“This is my gun right now.”

手に持った感触でわかった。グロックには十分なパラベラムが入っている。簡単に動作を確認すると、そのまま右手に持った。その瞬間、予備の弾が無いことに気づく。

“Oh, shit! Where’re my magazines?”

急いでマガジンを探したが、幸いにも近くに3つ落ちていた。それを拾ったとき、自分の首に違和感を覚え、手に取ってみる。ドッグタグのようだ。月明かりで読むことができた。

“Lester...is it my name huh?”

自分の名前を知ることができた。誰かに会った時、それが役に立つ。そう思った男—レスターは、いつでも撃てるようにグロックのロックを解除して歩き出した。

.....

道もわからないまま歩き続けていた、まさにその時だ。

「ねえっ、お兄さん」

“Huh? Me?”

声をかけられた。知っている言葉だ。そして、話すことができる。

(She speaks Japanese...)

相手の方へ振り向くと、年端も行かぬ、金髪のボブカットを揺らし、赤く大きな瞳を輝かせている少女が立っていた。

「俺に用かな？」

「お兄さん、日本語も話せるんだね。英語で喋られたからびっくりしちゃったよ」

改めて日本語で答えると、少女はそう言うてはにかんだ。彼女のかわいさに少し安心したのもつかの間、レスターは何故そんな少女が夜道を一人で歩いているのか疑問を抱く。そして、激しい敵意を周囲から感じ取る。

(What the fuck? Maybe they are taking.....)

彼の感覚は敵意の矛先を捉える—その少女に集まっているところを！

“Run with me!”

気がついたら、彼は言うなり少女の腕を左手で掴んで走り出していた。

「ええっ!?ちょっと待ってよお兄さん!!!」

それを自分と同じペースで走るのが難しいと理解したレスターは左腕を振り回し、少女を背負う形にしてスピードを上げた。後ろから怒号が聞こえてくる。思ったとおりのようだ。

「……お嬢さん？なんかやらかしたのか？」

状況を整理したくて少女に聞いてみたが、どうも要領を得ない。

「……わかんない。振り切ったと思ったんだけどな……」

(.....Anyway, if I don't kill 'em, they will murder us.)

さらに走るスピードを上げて振り切ろうとしてみるが、どのみち足跡で追いかけることに気づく。それならば、追っ手を始末するのが手っ取り早い。

「お嬢さん、よく聞いてくれ！今から森に入るぞ！」

少女は背中でこちらを注視してくれている。どうやら冷静な判断ができるようだ。

「奴らを道に迷わせてやる。タイマンなら何とかなるだろ」

「……無理だよ」

そう信じて説明したが、帰ってきたのは信じがたい一言だった。

「……どうしてだ？」

「私を狙ってるの、鬼だもん。お兄さん、殺られちゃうよ」

それを聞いた途端、レスターは一笑に付した。

「それがどうしたって言うんだ？殺らなきゃ殺られるし、殺るのは俺だ。奴らじゃない。ソレだけの話だぜ」

……少女は呆れた様子で聞いてきた。だが、彼はそれにも即答してみせた。

「……鬼退治の方法、知ってるの？」

「撃てば死ぬし、殴っても殺れる。簡単な話じゃないか。あとは、ちょうどいい

場所を見つけるんだ……おっ!？」

何かに気づいたレスターは、スライディングで減速していた。

「ちょっと!？どうして止まるの!?!」

「ココで戦おう。お嬢さんはそこの建物に隠れてて」

少女が指差された方を向くと、なるほど、人が住んでいなさそうな建物があった。

「あれって……」

「早く！奴らが近い！」

それについて聞こうとした少女を遮り、レスターは「鬼」が近づいていることを警告した。すると彼女は素直に建物へと入っていった。

(Okay, she is hiding. Bring 'em on!)

両手でグロックを構え、オープンサイトを「敵意」に合わせる。

(There!)

そして引き金を引く。マズルフラッシュ。銃声。排出される空薬莖。それはレスターに「鬼」の死を確信させた。

「二！お前は向こうの林を探せ！三！お前は川だ！四は……」

レスターが狙いを定めている頃、一際体格の良い鬼が、仲間に指示を出していた。だが、突如「三」と呼ばれた鬼の頭が弾け飛び、彼は鮮血を噴水のように吹き出して崩れ落ちた。転がる棍棒と太刀に怯える「二」を、リーダー格は一喝した。

「慌てるな！奴らはこの近くに居る。今から追い詰めるぞ！」

(Hah! Take down one! Next!)

こちらに気づいているはずの「敵意」に向けて、第2射の準備をするレスター。ゆっくりと身体を回転させると、今度はオープンサイトなしで狙撃する。その刹那、「敵意」が3つに減った。

(2 is enough for pistol snipe.)

これ以上その場に留まっていたの狙撃は現実的ではない。そう判断した彼は、近接戦闘に移るべく移動を始めた。

(三と五がやられたか……さっきの光で奴の居場所がわかったが……)

レスターを探しながら移動する3体の鬼たち。しかし、既に彼らは見失っていた。

「仕方がない。二と四は一緒に行動しろ！俺は安全を確保する」

リーダー格の鬼は残り2体の仲間に指示を出すと、林を出て周囲の安全を確認し始めた。足跡を見つけ、既に別の場所から狙われていることを知る。

「ココを一気に抜けて物陰に行く。急げ！」

それに対処する、次の指示が出された瞬間だった。

「うがぁ！」

破裂音。少し遅れて、二に激痛が走り片膝を付く。足首を撃たれたのだ。続く銃声は、短時間での連射を意味していた。リーダー格が二を助けるために飛びつき、四が伏せている間に次々とパラベラムが撃ち込まれ、既に二は事切れていた。

「くそっ！四！お前は向こうから回り込め！俺は後を追う！」

「おうよ！」

その間にレスターは最初に装填されていたマガジンを撃ちきり、リロードしながら走っていた。次は上から始末するつもりで、一旦川の方へと迂回していた。水音を立てないようにジャンプして飛び越すと、木の幹を蹴りつけ上へ登り、そこで息を潜める。

(C'mon scums...the death from above!)

川底を踏み分ける音が聞こえる。どうやらマガジンを川の方に捨てるのがうまく行ったようだ。

「木の皮が抉れている……この近くに居るらしいな」

「一、この木で足跡が途切れてるぞ」

「……そうか、奴は上だな。叩き落としてみよう。四、上を見ててくれ」

会話が終わり、木が激しく揺さぶられるが、問題はない。それは敵に見つかっていないということだ。

「……どうだ？落ちてきたか？」

「……そもそも居ないな……何も見えん」

「わかった。俺は向こうを調べてくる。お前はココを確保するんだ！」

どうやら見つからなかったようだ。あとは片方を始末するだけ。そう思って下を見ると、リーダー格が離れるところだった。その隙を突き、レスターは静かに枝から飛び降りた。

「!!？」

そのまま鬼の後頭部を掴み、地面に叩きつける。怯んだ隙を見逃さず、両腕でリフトアップ。レスターがどうやって自分を殺そうとしているか知った四は、痛みと恐怖のあまり泣き叫ぶ。

「がああああああ!!!」

肉が千切られ骨が強引に外される音と共に、その叫びはそのまま断末魔となった。リーダー格が駆けつけた頃には、血溜まりの中に1人の男が居て、その足元には2つに引き裂かれた四が死んでいた。近くには腸や脾臓などの臓器が転がっていて、そこからも鮮血が海を広げていた。

(こいつ…！俺たち鬼の殺し方を知っているのか!?)

一瞬たじろいだ瞬間、彼が襲いかかってきた。だが、リーダー格の鬼は怯まず足払い。それをジャンプで回避し頭突きで彼の歯をへし折るレスター。直後、彼のあばらに痛みが走る。カウンターパンチを食らったようだ。怯まず左フックを入れようとするが、強引に掴まれてしまう。

「手間取らせるばかりか、仲間を全部殺しやがって！仇討ちをさせてもらおう！」

そう言ってリーダー格の鬼が太刀を振り上げた瞬間、月明かりをもかき消す暗闇が襲った。一瞬動作が止まる。レスターもそうだったが、すぐに自分の目が見えていることに気づく。対する敵は何も見えないようで、自分の首筋を探している。このまま待っていても叩きつけられるのがオチだとわかったレスターは、無防備な金的を狙ってニーキックを入れた。

“Get off scum!!”

元々彼はわざと捕まり、油断させて一気にトドメを刺すつもりだったのだ。

「ぐっ!？」

左腕の拘束は脱出できていないが、これで態勢は整った。グロックで両膝を撃ち、痛みと神経の途切れで動けなくする。敵の左腕は執念で自分を捕まえていたが、右腕は蹴られた股間を抑えるために反撃どころではない。それを確認すると、すかさず腹に重い膝蹴りを入れる。

「……カハッ……！」

レスターは敵が血反吐を吐いた瞬間を狙って顎を掴み、そのままもぎ取る。もう奴は、満身に呼吸も出来ない。自分が作った状態を一瞬憐れんだ彼は、右手に持っていた顎を脳天に突き刺した。続いて、ちょっとだけ自由が効くようになった左腕も使ってその強靱な胸筋を引き裂く。これでリーダー格の鬼も絶命。左腕の拘束も解け、拳で軽く押してやると彼は後ろへと崩れ落ちた。

“Fuck your asshole!!”

弔い代わりに左の中指を立て死体を罵倒すると、レスターは少女を隠したはずの建物へと戻っていった。あばらの痛みが収まらないまま。月明かりは既に戻り、彼と死体と血溜まりを照らしていた。

(Agh...my leg being heavy!!)

建物の入口にたどり着く頃には、レスターに脂汗が浮かんでいた。内出血を疑うほどだった。だが、少女の無事を確認するまで死ぬわけにはいかない。その思いだけで意識を保っていた。

“I’m back...we’re safe now.”

ドアを開けて一番にそう告げると、少女が駆け寄ってきた。それを確認できたレスターは安心して座り込む。

「お兄さん!？」

少女がしゃがんで彼のシャツをめくる。すると、内出血を意味する痣ができていた。それを見た彼女の顔は、一気に青ざめていく。こみ上げてくる焦りと罪悪感から—

「どうして鬼を相手にココまで戦ったの!？」

慌てた口ぶりで聞いてくる少女に、レスターは諭すように答えた。

「決まってるだろう……君みたいなきれいな娘が困ってりゃ、放っておけるワケ……ねえだろ……」

彼の傷を見た少女は、ドアの外を見つめて安全を確認すると、助けを呼ぶことを決めた。

「どこ……行くんだ？」

「……せっかく助けてくれたのに、お礼もできないまま死んじゃうのは嫌!!待ってて……」

涙ぐんで外へ駆け出す少女を止めようとしたレスターだったが、立ち上がるのに時間がかかってしまう。その間にも出血は進んでいき、立ちくらみもしてきた。

(I’m dying...but, her action is dangerous. I wish for safe return, however...agh...)

そのままフラフラと歩き出した時だった。

(...Another girls...are talking?)

意識が朦朧とする中、できるだけ会話を聞き取ろうとするレスター。目をしっかり見開いて、その主を探すが見当たらない。声だけが聞こえていた。

「この……で銃……した……さ……もさがし……？」

「……ました、お嬢……」

(I'm lucky! Someone...came here! I...must...tell her this!)

足を引きずるようにして少女を追いかけたレスターは、それまではその場に居なかった誰かとぶつかって倒れた。

“Gah!”

何とか身体を起こすと、彼とぶつかった女性がこちらを振り向いた。その瞬間、レスターはその女性の美しさに息を呑んだ。

スラリと伸びる、ストッキングに包まれた脚……だが、ミニ・スカートから覗く太腿は程よくムチツとしている。それは、彼女の桃尻が彼好みであることを予感させた。エプロンドレスに包まれた健康的な身体一胸の大きな盛り上がりは、長径で1メートルを超えているだろうか。見ただけで強いハリを感じさせた。

そして月明かりを受けて輝く銀髪。宝石のような青い瞳は、鋭さと柔らかさを同時に投げかける。彫りの深い顔立ちが、どこことなくノーブルな雰囲気を持っている。そんな美女が、自分の目の前にいる。

“Ah...you're so beautiful...I knocked out!”

レスターは彼女の美しさに心打たれ、思わずそう呟いていた。

「お嬢様！ 1人見つけました！ こっちです！」

大声で主人を呼ぶ彼女。その声もまた、美しかった。レスターは、完全に彼女に惚れていた。彼女にまた会うために、生きる。そのためには何が出来るかわからないが、何もしないわけにはいかなかった。彼女の主人が到着する頃には、既に立ち上がろうとしていた。が、そこで限界だった。彼は深い闇へと落ちていった。

.....

.....

.....

“Agh.....”

目はうっすらとしか開かないし、まだ身体が痛む。そして、微かな視界は自分が今屋内に居ることしか伝えられない。

“Am I alive...?”

視覚、聴覚、嗅覚、感触が回復していく。自分を取り巻く状況がわかっていく。布団が掛かっていた。視線の高さから、おそらく自分はベッドに居る。レスターはそう理解した。

「やっと起きた！良かった……！すぐに師匠を呼んできますね」

薄い藤色の髪をした乙女はそう言うと、奥の扉へと消えていった。それを確認したレスターは、お腹が空いていることに気づく。どうやら、何とか助かったようだ。

(I ate nothing.)

感覚が直ってから、あれほど感じていた痛みは消えていた。それに加えて空腹を覚えた。脳の働きが徐々に戻っていく。彼はベッドの上で、意識が飛ぶ前のことを思い出していた。鮮烈に覚えているのは、月明かりに照らされて神々しく輝く銀髪の美女—

(I want to see her again....AGAIN AND TELL HER!!!)

その時、先の乙女が消えた扉が再び開いた。他に銀髪の女性が居るが、惚れた美女ではないようだ。彼女こそ、乙女が言っていた「師匠」だろうか。

“.....How long I spent here?”

レスターは、「師匠」にどれくらい寝ていたかを聞いてみた。すると彼女はすんなり答えた後、驚きを隠せない様子で付け加えてきた。

「2日よ。あなたは2日間、そのベッドで眠っていたのよ。……それと、レミリアさんから聞いたけど、鬼と戦ってほとんど一方的に全滅させたんですって？」

彼女が明らかに疑いの目を向けていたので、少しムッとしたレスターは皮肉たっぷり、彼女にわかりやすいよう日本語で言い返した。

「フン。連中なんざただのザコだ。最後の奴がちょっとだけ粘ってきたがね」

「ふーん……あなた、本当にココのこと知らないんですね」

そう返してきたのは藤色の乙女だ。レスターは見ないふりをしていたが、常にウサギの耳一を付けている。

“Whoa whoa whoa whoa! Where am I? What do you call this legion?”

その質問がされると、ふたりは呆れた様子で彼に教えた。

「……幻想郷。この結界内部の地域一帯を、住民みんながそう呼んでいるわ」

“……Huh? Is there electromagnetic shields?”

「……………」

浮かび上がる苦笑い。どうやら知識は残っているようだが、実はレスターに思い出せることがそれ以外無い。銀髪の美女への想いを胸に、ココで生きるのだろうか。それにしても彼は無知すぎる。これからが大変だ、と「師匠」と呼ばれた女性は思った。

Touhou Project Fan Fiction

Realize One's Brutal Life

- Prologue -